

「ミュシャ展 マルチ・アーティストの先駆者」関連イベント

ミュージアムトーク&ミニリサイタル

日時 2024年3月21日(木) 11:00-12:00

場所 熊本市現代美術館 ギャラリーI

講師 田中彩子(コロラトゥーラ・ソプラノ)、有島京(ピアノ)

司会進行 富澤治子(熊本市現代美術館主幹兼主査学芸員)

1部 ミニリサイタル

- ・有島京 演奏曲目 ラヴェル「水の戯れ」
- ・田中彩子 演奏曲目 ハーン「クロリスへ」、デラックア「ヴィネラル(田園詩)」
(ピアノ伴奏・有島京)

2部 ミュージアムトーク



ミュシャ展 マルチ・アーティストの先駆者

会期 2024年2月10日(土) - 4月7日(日)

会場 熊本市現代美術館 ギャラリーI・II

富澤 (拍手) すばらしい演奏でした。本当にありがとうございます。

まず初めに、有島さんと田中さんに、本日、この楽曲を選んでいただいたお話からお聞かせいただきたいと思います。

有島 皆さん、こんにちは。今日、何を演奏するかなかなか決められずにいたんですけれども、昨晚、会場がセッティングされたところを見せていただきまして、会場内に《水の精たち》(出品番号117)という作品が展示されているとお聞きし、その作品を見て、昨日のリサイタルのプログラムにもありましたが、水の精が出てくるラヴェルの「水の戯れ」で始めようかなと思いました。ラヴェル自身が楽譜の最初に、「水にくすぐられて微笑む河の神」と書いていることからの連想です。

富澤 演奏される時、そういう情景を思いながら演奏されるのですか？

有島 この曲は、自分がすごく若い時に初めて勉強したのですが、その頃の私は、もう本当に小節ごとに「こんなイメージ」、「こんなイメージ」と、書き込みをしていたこともありました。最近では、練習をしている時も、本番の雰囲気も、そのときどきで違うことを受け入れて、それを生かすように、ある程度即興的な部分、不明瞭な部分、そういう余地を敢えて作っているような気がします。練習をしているときに、突然「あ！」みたいにイメージが湧いてくる時も、「これか！」みたいな気づきがあることもあるし、それが変わることもあるし、そんな感じです。

富澤 演奏されるごとに、新しい気付きがある曲なんですね。

続きまして田中さん、お願いします。

田中 1曲目の「クロリスへ」は、やはりミュシャといえば美しい女性達が一番に思い浮かぶと思うんです。この曲は、そういう美しい女性に「不死の果実アンブロジーアを食べるよりも君と一緒にいたい」と歌う、情熱的な歌詞の曲なんです。ミュシャの絵を見ると、それくらい魅力を感じてしまう女性って、こういう女性なのかもと想像しましたので、「クロリスへ」を選びました。

2曲目は、「ヴィネラル」です。日本語で「田園詩」と言いますがけれども、綺麗な空気の朝の雰囲気の曲です。ちょっとピアノで見えにくいですがけれども、ここに展示されている「連作装飾パネル：一日」のうち《朝の目覚め》、《昼の輝き》の作品のような…。

富澤 《朝の目覚め》に描かれたピンクのドレスが、田中さんの衣装とピッタリ重なっていると、昨日のリサイタルから思っておりました！

田中 また、会場内のあちらこちらの作品で、ツバメが飛んでいる描写がありましたね。他のアイデアもあったんですけど、昨日の夜、会場に来て、作品を見て、朝焼けの美しい空

気の中で、鳥たちがピロピロって鳴きながら飛んでいるイメージが膨らみまして、こちらに決めました。

富澤 ありがとうございます。

ミュシャは、当時はオーストリア＝ハンガリー帝国だったチェコの出身です。パリで活躍している時も、作品にはチェコで良く咲いているお花を描いていました。そのように豊かな自然が背景に描かれることが多く、田中さん、さすが!と思いながらお伺いしておりました。

本日のように、美術館で、ミュシャ展の展覧会場内で、ご公演いただくというのは、私共としても大変稀な事です。しかしながら、お二人は国際的に活躍されているので、ミュージアムとか、世界遺産とか、様々な場所で公演されたことがあるのではないかと思いますので、これまでの経験のお話をお聞かせいただけますか。

有島 ヨーロッパや日本にて、美術館や博物館等で演奏する機会はこれまでもいただいたことがあります。今回のように美術館にて一人の芸術家の作品と人生に強く関連するプログラムを組むのは初めてでした。あとは、教会で演奏するような機会はヨーロッパでは結構あります。

富澤 今回のような、お客様との場所的な距離の近さって、演奏されている時どう思われます？

有島 小中学生の時は、お客さまが近いのはとても緊張して苦手だったんですけど、段々と年を取ってくると、色んなことが、なんでもありになってきました。今の私は、お客様と一緒に繋ぐ関係というか、一緒に感じ合いながら演奏して空間が共有できるっていうのがとても好きです。今回は、ミュシャの作品とともに、作品にも見つめられながら、イメージしているものを皆さんと共有できるというのは本当に最高っていう感じです。

富澤 嬉しいです。ありがとうございます。

田中さんは、上賀茂神社やルーブル美術館で公演されたことがあるとお聞きしています。

田中 ルーブル美術館では現代アートとのコラボだったので、ベル・エポックの時代の作品を背景に歌うのは今回が初めてです。今までも、ずっと美術館で公演してみたいと思っていたので、とても嬉しいです。

また、モノオペラ「ガラシャ」という、細川ガラシャをテーマにしたオペラをつくったので、その初演は、京都の上賀茂神社にある橋殿という普段は祈祷する場所で行いました。通常は、穢れたものは足を踏み入れてはいけないところを踏み入れさせていただきまして、そこで演奏しました。

富澤 どんな気分でした？

田中 リハーサル中にずっとゾワゾワするような経験とかもあって、神聖な雰囲気を感じながら歌いました。

でも今日も、ミュシャの絵を見ながら歌い、この空間を皆さんとこうやって共有できたのはすごい!と思いました。

富澤 ありがとうございます。作品が持つメッセージと、なにか力のようなものが、場をつくっていくということは、いつも展覧会を企画し、会場をつくりながら実感しているところで、毎回、展覧会が変わるごとに空間が変わっていくのが面白いと思っています。今日は、お二人の公演によって場の雰囲気が強まっていく印象を受けて、すごくグッときたところでした。

さて、お二人は元々ミュシャの作品が好きとお聞きしております。特に好きな作品についてお話を聞きたいと思います。また昨日のリサイタルの、お二人の衣装はミュシャをイメージして選ばれたとのことでしたので、そこも併せてお話を聞きたいと思います。

有島 昨日、田中さんが着用されていたのは、こちらのピンクの衣装で、私は、緑とグレーのグラデーションの色合いの衣装でした。今日私が着ているのは、袖があるので、美術館とか教会で演奏するときによく着る衣装なんですけど、どちらもミュシャの生きた時代や彼の絵画にでてくる女性像をイメージしながら選びました。

好きなミュシャの作品…、1つに決めるのは難しいですね。昨日この会場に来たときに、田中さんと演奏会前にこの絵の話をしていたこともあって、こちらの連作装飾パネル「一日」シリーズがまず目にとまり、実際に見るとなんともいえない独特な清んだ色彩が印象的でした。パリ時代のキラキラとした作品ももちろん素晴らしいんですけど、ミュシャが自分自身のために描いていたスケッチや、素描など、個人的な作品を今回初めて見て、私はとても好きだなと思いました。

東京での高校時代までは、ミュシャといえば、パリ時代のポスターなどのイメージしか持っていなかったのですが、その後ポーランドに留学し、プラハの友人を訪ねた際、「ミュシャを見に行こう」と誘われて行ったら、《スラヴ叙事詩》という作品に出会いました。壮大な歴史画をたくさん描いていて、しかもすごく大きいんですね。ビックリしてしまって圧倒されました。一番今までで印象に残っているという意味では、《スラヴ叙事詩》です。

富澤 今回この会場に展示されている全作品は、チェコ在住の本業がお医者さんのコレクター、チマル博士のプライベートなコレクションからご紹介しています。この会場にお集まりいただいている方々は、もちろんお二人のファンであり、ミュシャのファンでもあると思うんですけども、本展にこれまでご来場された方からお聞きした感想の多くは、「デッサンをなかなか見る機会がなかったので、ミュシャの魅力を再発見した」というものでした。先程、有島さんにお話をいただいたように《スラヴ叙事詩》のために描いた下絵なども会場内に展示されております。

かつて東京で《スラヴ叙事詩》の全 20 点を紹介する展覧会が行われたんですけども、それ

を観覧されたことのある方から、当館の本展をご覧になって、「ここでこの下絵を見れたのはすごくラッキーだった」とのお話もありました。ミュシャの作品は、国内でも見る機会がとても多くあるのですが、見る度に新鮮な発見のある作家ゆえ、ということもあるんだろうなと改めて思いました。

田中さんはウィーンのご自宅にミュシャの「芸術：音楽」を飾っているとお聞きしています。その他、会場内で見つけた気になる作品についてお話しいただけますか。

田中 ミュシャの「四芸術」は、「ダンス」「音楽」「詩」「絵画」です。そのうち、「音楽」を自宅に飾っています。この会場では展示されていません。

私もチェコのミュシャ・ミュージアムに行ったのですが、その時はなんと重要な作品全部がどこかに貸出中で、全然見られなかったという苦い思い出があるんです。今日、ここ熊本で、チェコの本場より充実した内容で、貴重な作品も、スケッチも揃っているのを見ることが出来て、すごいと思いました。

私も、王道の「ミュシャといえば」ではない作品がすごく好きです。フワツとした感じの作品が好きなので、小さな作品ですが「書籍『永遠の歌』（ポール・ルドネル著）の挿絵より」(出品番号29)が気になりました。作品の題名が興味を引きました。いつも絵と題名を見て「なるほど、うん」と思いながら見るのが好きで、なんなら理由が書いてあったりすると、より好きです。

富澤 昨日のリサイタルでも話題にされておりましたように、ミュシャの作品は柔らかな色合いの作品が多くて、その色合いこそミュシャの人気の理由の一つでもありました。もちろんサラ・ベルナルのポスター作品群は街で目立つことがとても大事なので、そのような目的で描かれているんですけども、そうではなく、家で飾って楽しむ用に制作された作品は、毎日眺めて心が和むというか、寛ぎに繋がるような画風や色彩がやっぱり好まれたという背景があります。さて、昨日、展覧会とのコラボとしてリサイタルを開催したことについて、お二人に、美術と音楽が別々に存在するのではないというアプローチはとても良いと思ったとお話いただいたところを、もう少しお聞きしたいと思っています。プログラムも、ミュシャと同時代の作曲家の作品を選んでいただきました。

有島 昨日のリサイタルでは、私のソロの第一部での演奏は、ラヴェルの「ソナチネ」や「水の戯れ」から始まり、ポーランドのシマノフスキというミュシャと同時代の作曲家の「メトープ作品 29 より “ナウシカア”」、そして、ミュシャと同じモラヴィアの出身であるヤナーチェクという作曲家のピアノソナタ「1905年10月1日、街頭にて」で締めくくるという構成にしました。当時は、美術と音楽、文学、オペラやバレエなど、全てが強く関わり合って刺激し合って発展してきたのですが、現代は、それぞれがそれぞれの場でやっている傾向が強いので、今回こういう機会をいただいたことがとても嬉しくて、プログラムを考えるのもワクワクしました。でも構成していく段階ではとても悩み、このプログラムに辿り着きました。

富澤 リサイタルの時に、「ラヴェルのパリから、シマノフスキ、ヤナーチェクと、段々スラヴへと近付いていくラインナップにしました」とお話をされていて、はっとしました。

有島 今回のミュシャ展は、あくまで彼のパリ時代の華やかな作品を中心に展示されると聞いていました。しかし、ミュシャの人生や作品について知っていけばいくほど、当時の民族運動の高まりのなかで、彼がいかにスラヴ人としての自意識を常にもっていたかということがわかり、その部分をどう演奏曲目と共鳴させられるだろうかと考えました。

ヤナーチェクのピアノソナタは、昨日リサイタルでもお話したように、1905年、ブルノにて、チェコ語による大学の設立を求めてデモに参加した青年がドイツ人の軍隊の銃剣に斃れる、という事件を目の当たりにしたヤナーチェクが強い悲しみと怒りのなかで書き上げた曲です。シマノフスキの人生も、ロシアで十月革命が起きたときには家を追われたりと、波乱に満ちたものでした。それぞれの作曲家が、19世紀終わりから20世紀にかけての政治的な動乱と抑圧のなかを生き、自分自身の、また、自国の音楽的なアイデンティティを探り続けた、という点で、共通する部分はあるかと思います。

この二人の作曲家に限らず、当時は、ルーツを探る行為として、自分の国の民謡などの収集が各地で活発に行われるようになった時代で、ミュシャの人生とも重なりますが、それはナショナリズムや民族国家という意識が芽生えてくる時代でもあって…、それが結局現在私たちの抱える様々な問題にも繋がっているということなので、今の状況への問いともなるようなプログラムにしたいという思いがありました。

富澤 ありがとうございます。ミュシャは、パリから故郷に戻り、チェコスロバキアの建国に献身的に関わり、切手や紙幣を無償でデザインをしました。先程話題にもなりました、《スラヴ叙事詩》の「ポスター《スラヴ叙事詩》展」(出品番号54)も、もちろんチェコ語の文字フォントをデザインしています。母国語へのこだわり、言葉って音の話でもあります。

さて、田中さんは、すごく華やかなラインナップを用意していただきまして、プーランクの「愛の小径」では、「これぞパリ!」とユーモラスに曲紹介をしていただきました。私は美術史が専攻ですので、視覚芸術を中心に「ベル・エポック」を追体験してきたんですけども、それがいかに華やかだったのか、音楽だとすごい実感できる!と昨日は感動しました。

田中 ミュシャをテーマにプログラムを組む時、歴史や、実際交流があった音楽家などを調べていくうちに、やっぱり彼の根本的な部分にはスラヴがあるので、東欧の雰囲気のある作品を色々調べたんですけども、うーん…歌えそうな作品がないと思いました。有島さんとは以前お会いしているので、きっと彼女なら、「正に、そこ!」を攻めてこられるだろう、じゃあ私は敢えて、パリ時代の軽やかなものにテーマを絞ろうと思いましたので、これぞまさにベル・エポック、という華やかな楽曲を選んでいきます。

また、その歌詞の意味とか歴史は一旦置いておいて、私は曲の色みたいなのを大体把握するようにしています。例えば同じ年代だったら、マーラーも同じくオーストリア=ハンガリー帝国の

出身なので、ミュシャと近いんですけども、なんとなく私が歌うマーラーの曲の色味と、この展覧会、この会場の、ミュシャの美しい女性達とはリンク出来ませんでした。ですから敢えてそこは触れずに、基本的にはフランスの作曲家から選びました。

ドビュッシーの「月の光」と「星の夜」は、ミュシャの連作装飾パネル「星:北極星」と「星:月光」(出品番号 65、66) から連想して選びました。でも構成の最後にはウィーンに戻ろうと思って、アンコール曲をヨハン・シュトラウス 2 世の「春の声」にしました。あの時代の芸術の根本の場所、最新の表現が生まれた場所といいますが、重要な場所はウィーンなので、初心に帰るといいますか、ミュシャが最初に画業をスタートした場所に戻っていくという流れで組んでみました。

富澤 お二人ともラインナップを考える時に、ミュシャの人生を地図にマッピングして俯瞰されてイメージされたんですね。パリやウィーンといった美術と音楽の重要な拠点にミュシャがいたということも、もちろんあるんですけども、ミュシャの人生における移動がお二人の今回の選曲のポイントだったことを、感動しながらお聞きしておりました。

最後に、田中さん、お名前に関する色彩へのこだわりの小話が面白かったので、ぜひここでもご紹介ください。

田中 もちろんです！

さて、ミュシャの特徴であるこの色とりどりの色について語りますと、私の名前は「彩子」であり、色彩の「彩」の字です。この言葉をイタリア語にすると「コロール」で、「コロラトゥーラ」はそこに由来します。ですので簡単に言うと、「彩子」は「コロラトゥーラ」なんですよっていう謎の名前アピールです(笑)。これは機会がある時にちょこちょこ自己紹介に入れているんです。今回は、ミュシャといえば「カラー」をテーマに考えたので、チャンスでしたのでご披露しました。

富澤 ありがとうございます(笑)。ほか、昨日と今日の髪型も、ミュシャをきっかけに考えてくださったとお聞きしました。

田中 昨日のコンサートでも言いましたが、参考にいただいた展覧会カタログを見ましたら、ミュシャが描いた女性たちの髪が、こうフワフワっとカールしていたんですよ。有島さんとリハの時にそのことを話題にしたのですが、二人とも髪とか諸々あんまり何もやらないタイプで、有島さんはそのままいきますと。私もその気持ちはすごいわかるって思ったので、「じゃあ、なんとか私は巻いてみようかな？」と、前日にドンキに行き、髪を巻くヘアアイロンを買ったんです。数億年振りにミュシャに寄せて髪を巻いてみました(笑)。

富澤 ミュシャのくるくるとした髪の毛の描写は、最初、マカロニと呼ばれて中傷されたのですが、そのうちにそれがミュシャの特徴の一つになっていきました。女性同士でご出演される時は、衣装とか髪型の話とかするんだなーと、私、そういうことを全く想像したこともなかったので新鮮にお聞きしました。

有島 する人はすごく前もって準備したりすると思いますけど、私達は、そういう話も何のやり取りもしないタイプで…。

田中 確かに。「あ、そういえば何着る？」みたいな感じで…。

有島 そうそう。なんかそんな感じです。どうしても演奏のことばかりで、もうちょっと余裕が欲しいなと思っています。

富澤 本当に素晴らしい演奏でした！最後に、今後の活躍とかについてのご紹介や、ミュシャ展への応援メッセージなども一言いただけると、すごく嬉しいです。

有島 こんなにたくさんの方々においでいただき、ずっと聴いていただきありがとうございます。皆さんがミュシャ展に来られてどういうものを受け取られ、それに音楽が加わることで、どのように変化をしたり感じられたのか、とても興味があります。私は個人的に美術館がとても好きなので、もちろんコンサートホールも素敵ですけど、この度美術館で演奏させていただき、この興奮を皆様と共有できて、本当にありがたく思っております。このような活動が続けられれば嬉しいです。

田中 同じようなコメントになりますが…。まさかこんなにたくさんの方々がお越しくださるとは思わず、ビックリしました。どうもありがとうございます。

絵って私も大好きで、自宅の近所のウィーンのミュージアムの入館パスを買おうかずっと迷ってるぐらい好きです。そのミュージアムのコレクションって、ミュシャと同じ時代の作品が多いんですけど、オーストリアはこういう雰囲気と全然違って暗いものが多い。今回ミュシャの作品を見て、「同じ時代なのにこんなに違う絵を描くんだな」と、当たり前なことなんですけど改めて思いました。そして、今この時代に、まだこのように作品を見る事が出来ることを、なんてすごいことなんだろうって思います。

私はいつも歌を歌うとき、モーツァルトでもシューベルトでも、近所のおじさんが作曲したって思うぐらいに身近に自分の中に入れてから出力するようにしていて、今回のミュシャも「偉大なミュシャがこの絵を描いた」という風にとらえずに、「一人の男が描いた」と思うと、すごくリアルに感じられます。加えて、最初に有島さんが弾かれたラヴェルの「水の戯れ」とかを聞きながら作品を見てると、自分の中で色んな世界が広がるというか、目で見るものが立体的に空間となって、またそこで、新しい自分の中だけの世界が広がっていくような印象を受けました。私も、有島さんがおっしゃったように、美術と音楽が共に寄り添える場所がもっと増えていったらいいなと思いました。このミュシャ展の大成功を引き続きお祈りしております。

富澤 大変名残惜しいのですが、お時間となりました。お二人とも本当にありがとうございました。当館は現代美術館ですので、新しいアートの扉を開ききっかけづくりを様々なアプロ-

チから今後も取り組んでまいりたいと思います。本日はありがとうございました。

編集：富澤治子